

いわて幸せ大作戦フォーラム

(開催日時) 令和2年1月13日(月・祝) 13:30~15:40

(開催場所) アートホテル盛岡

次 第

- 1 オープニング 岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」による伝統芸能演舞
- 2 開会
- 3 主催者挨拶
- 4 いわて県民計画(2019~2028)に関する説明
- 5 スペシャルトーク
- 6 クロストーク
- 7 閉会

伝統芸能 演舞 大森御神楽(奥州市)「鶏舞」

岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」

○司会(千葉星子) 会場の皆様、これより開会に先立ちまして、岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」の皆さんによります大森御神楽「鶏舞」を御覧いただきます。

大森神楽は、奥州市衣川大森の衣川小学校大森分校で組まれていた踊りです。神楽は、古事記の神話「天岩戸」が起源でありまして、天岩戸に閉じこもった天照大神が岩戸から出てきたとき、世は光を取り戻し、喜んだ鶏たちが一斉に空に飛び立った様子を現したものとされておりまして。

鳥兜をかぶり、右手に錫杖、左手に扇を持って踊る神楽の動きは抽象化された鶏の動きを意味する旋回が多く入っていることを特徴とします。また、鶏は誕生、生命などを象徴しておりまして、豊作や子孫繁栄など生産的な願いが込められた踊りであるとも考えられております。

それでは、岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」の皆さんによります大森神楽「鶏舞」御覧いただきます。

(演舞)

○司会 オープニングに先立ちまして、見事な演舞を御披露いただきました。(拍手)

ただいまは岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」の皆さんによります大森御神楽「鶏舞」でした。

岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」の皆さんは、およそ20年以上活動しておりまして、毎年11月に開催しております単独公演も今年度で22回目を迎えております。岩手県に伝わる盛岡市澤目獅子踊り、三本柳さんさ踊り、奥州市の大森御神楽、岩泉町の中里七ツ舞の4つの踊り、さらに県外に伝わる宮城県の寺崎はねこ踊り、熊本県のおてもやん、北海道のソーラン節の3つの踊りを踊っていらっしゃいます。また、各踊りの保存会様の練習に参加をさせていただいておりまして、定期的に御指導もいただいております。日々切磋

琢磨しながら練習に励んでいらっしゃいます。県内各地からいただく依頼公演も多数行っておりまして、平成 29 年度にはチェコのプラハで行われた J A P A N ウイークというイベントにも参加をいらっしゃいます。

オープニングを飾っていただきました岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」の皆さんにどうぞ皆様いま一度大きな拍手をお送りくださいませ。(拍手)

ありがとうございました。

素晴らしい演舞を御披露いただきまして、皆様も伝統芸能の良さをしみじみと感じられたのではないかと思います。

開会

○司会 それでは、皆様、改めまして、こんにちは。本日はようこそ「いわて幸せ大作戦フォーラム」にお越しいただきまして、誠にありがとうございます。

本日は今年度スタートしました「幸福」をテーマとする県の新しい総合計画いわて県民計画（2019～2028）を紹介しながら岩手県の魅力や将来の可能性について各界からお招きしたすてきなゲストと御来場の皆様と一緒に考えるフォーラムとなっております。

私、本日の司会進行を務めさせていただきますフリーアナウンサーの千葉星子と申します。どうぞ皆様、よろしく願い申し上げます。(拍手)

ありがとうございます。

主催者挨拶

岩手県知事 達増拓也

○司会 それでは、ここで主催者を代表いたしまして、岩手県知事、達増拓也より御挨拶を申し上げます。(拍手)

○達増知事 皆様、こんにちは。また、新年明けましておめでとうございます。

岩手大学「ばっけ」の皆さんの御神楽により、非常におめでたい幸せな雰囲気を作ってくださいまして、改めてお正月の雰囲気も味わっていただけたのではないのでしょうか。

本日のフォーラムのタイトルとなっている「いわて幸せ大作戦」という言葉は、去年の岩手県の観光キャンペーンのスローガンにもしておりましたので、盛岡駅初めこの岩手の雄大な自然を背景に、トレジャーハンターの格好をした「そばっち」が描かれた「いわて幸せ大作戦」というポスターを御覧になった方も多いのではないかと思います。

しかし、「いわて幸せ大作戦」は観光のスローガンだけではございません。去年岩手県の新しい総合計画「いわて県民計画（2019～2028）が策定され、年度の始めからスタートしていますが、その基本目標は「東日本大震災津波の経験に基づき引き続き復興に取り組みながら、お互いに幸福を守り育てる希望郷いわて」でありまして、そういう意味では「いわて幸せ大作戦」は、県政全般のあらゆる政策分野に関わる言葉であると言えるものがあります。計画、作戦と謳っておりますので、「幸せ」、「幸福」の実現にはやり方があるのではないかと、うまくやればそれを高めることができるのではないかと、その秘訣といえますか、要領のようなものがあるのではないかと、そのような見方、考え方が前提になっており、計画や作戦という言葉を使っているわけです。そうであれば幸福を高めていくには学びとい

うことが大事でありまして、幸福を高めるその例を学び、どのようにすれば幸福度を高めることができるかを考える、そのような学びの機会として今日のフォーラムを企画しております。

本日は村上弘明さんに御参加いただいておりますが、村上さんには岩手の県外広報の先頭に立って岩手をアピールしていただいておりますが、そのような観点からも岩手が提供できる「幸福」がどのようなものであるかをご紹介できるのではないかと思います。

また、岩手の各分野で活躍している皆さんによるトークセッションも用意しております。それぞれの最前線においてどのような幸福のチャンス、また幸福の実績というものがあるのか、ということを学んでいただきまして、本日御参加いただいている皆さんのそれぞれの幸福を高めること、また皆さんが周りの人たちの幸福を高めることに役立てていただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。(拍手)

いわて県民計画説明

岩手県政策地域部長 白水伸英

○司会 それでは、ここでいわて県民計画（2019～2028）につきまして、岩手県政策地域部長、白水伸英より御紹介をさせていただきます。(拍手)

○白水政策地域部長 皆さん、改めまして、こんにちは。私は、岩手県政策地域部長をしております白水と申します。本日はどうぞよろしく願いいたします。

私からは10分ほど時間をいただき、「幸福」をテーマとする「いわて県民計画（2019～2028）」についてお話をさせていただきます。

皆さん、日々の暮らし、生活の中で幸せというのは感じておられるでしょうか。あるいは家族の皆さんは幸福でしょうか。岩手県は、県民の皆様一人ひとりの幸福に着目した政策を進めようとしています。

その背景をこの4つの雲でまとめていますが、はじめに一番左上を見ていただきますと、皆さん御承知のとおり今年の3月で東日本大震災津波から丸9年となります。県では、この復旧・復興に全力で取り組んできましたが、その中でいわゆる「幸福追求権」を保障するという基本方針として取り組んできました。今後はこの考え方を県政全体にも広げていきたいと考えています。

次に、右上の雲の方を見ていただきますと、一方で経済学あるいは社会学などさまざまな分野で幸福度に着目した研究が進んできています。あるいはいろんな自治体あるいは国でも一部、政策に取り入れるという動きも広がってきています。さらに左下ですが、これも皆さん御承知のとおり東京一極集中ということで人口がますます東京に集まっている状況が起きています。そのような中で、東京圏の過密あるいは岩手も含めた地域の人口減も同時に進んでいます。そうした状況の中で、岩手では地域の皆さん一人ひとりの暮らし、仕事を大切にされた政策、こういったものを推進していきたいと考えています。

そして、一番右下ですが、岩手県の風土の中で培われた他人との関わり、あるいはつながりを大切にする社会観、こうしたものも踏まえて今回「幸福」をキーワードとする計画の策定を進めてきたところであります。

次のスライドに移りまして、1番に計画の趣旨・役割については大きく3つまとめてい

ます。1つは長期的展望。これは10年を期間としていますけれども、これは変化の激しい時代だからこそしっかりと10年間、長期的な展望のもとに県政を推進していこうという考え方です。

2つ目は、この計画の下に個別の計画、例えば福祉の計画であったり、子育ての支援の関係であったり、あるいは地域活性化、地方創生の計画などを策定したうえで、毎年度の予算を編成していくこととしています。

そして3つ目、これが一番大事ですが、県民の皆様、それからさまざまな団体と一緒に取組を進めていくためのビジョンということで、「県の計画」ではなく「県民計画」という名前にしております。

次に、2の基本目標につきまして、先ほど知事からも紹介がありましたが、第一に東日本大震災からの復興に引き続き全力で取り組みます。そして、「お互いに幸福を守り育てる希望郷いわて」ということで、県民の皆様あるいは岩手県と関わりのある全ての人々がお互いに幸福を守り育てるということ、すなわち一人ひとりが希望を持つことのできる「希望郷いわて」を実現したいと考えています。

具体的に話を進めていきますが、ではこの計画の政策の柱立て、構成はどうなっているかということですが、これについては、まず県民の皆さんに調査を行いました。どのような調査をしたかといいますと、皆さんが幸福かどうかと考えられる時に、日々の生活の中で何を一番大事に思っておられるかということについて調査しました。私は健康が一番大事だな、あるいは家族のことが大事だな、あるいは仕事からしっかりと収入が得られることが大事だなと、皆さんいろんな御意見をお持ちですが、そのような皆さんの御意見を基に10の政策分野を例えばⅠの「健康・余暇」であれば、この政策の下に医療の充実であったり、あるいはⅡの「家族・子育て」であれば子育て支援の政策であったり、あるいはⅥの「仕事・収入」については、例えばものづくり産業だとか、農林水産業あるいは観光業の振興であったり、あるいはⅨの「社会基盤」であれば道路も含めたインフラの整備をしっかりとしていこうと、こういった政策を具体的にそれぞれの計画に記載しているところです。

それでは、その政策を進めていく中で皆さんの感じておられる幸福あるいは幸福度をどのように測っていくかを考える際に、まずは先ほど申し上げましたように皆さんに調査やアンケートにより実態をお聞きして、日々感じておられる主観的な幸福感を捉えつつ、一方で例えば「健康・余暇」の分野であれば健康寿命、「仕事・収入」の分野であれば1人当たりの県民所得といった、いわゆる客観的なデータをしっかりとチェックしていく、これらについては全国比較もできるデータでもありますので、そうしたデータと照らし合わせながら県民一人ひとりの幸福度が高まっているかを確認しながら政策を進めていこうと考えております。

加えて、計画には「新しい時代を切り拓くプロジェクト」ということで、11のプロジェクトも盛り込んでいます。先ほどこの計画は長期的展望を基に作成したとお話ししましたが、10年だけでは足りず、さらにその先も見据えた取組も必要なところもありますし、あるいは分野横断的な取組、あるいは現在、AIや5Gといったさまざまな先端的な科学技術が注目をされていますが、そうした科学技術を活用したプロジェクトにも取り組むということで、11のプロジェクトを定めています。

その1つとして、御承知、の方も多いかと思いますが、ILC、素粒子実験施設の北上山地への誘致のプロジェクトを掲げています。ILCは全長20キロメートル、世界に1カ所だけつくる研究施設です。

具体的にはILCを活用したイノベーション拠点の整備だとか、あるいは交流人口の拡大など、さまざまな取組を進めていこうとしています。

また、岩手を大きく緩やかに3つのゾーンに分けた3つのゾーンプロジェクトにも取り組みます。1つは県央あるいは県南地域を想定した「北上川バレープロジェクト」、そして、県の県北地域あるいは北岩手の地域を対象にした「北いわて産業・社会革新ゾーンプロジェクト」、さらに三陸沿岸地域を対象にした「三陸防災復興ゾーンプロジェクト」ということで、3つのプロジェクトを盛り込んでいます。

「北上川バレープロジェクト」につきましては、先ほど申し上げましたように県央や県南地域を対象にした北上川流域においてさまざまな新しい技術を産業面あるいは生活分野に導入に積極的に取り組んでいくプロジェクトです。

「三陸防災復興ゾーンプロジェクト」につきましては、皆さん御承知のとおり、三陸沿岸道路あるいは、現在残念ながら一部不通になっていますが、三陸鉄道も昨年3月に一貫運行が開始されましたので、こういった新たな交通ネットワークを生かした地域の振興あるいは三陸の魅力、例えば豊かな食やジオパークなどの豊かな自然、歴史、こういった三陸の魅力をしっかりと発信していくことを目指したプロジェクトです。

「北いわて産業・社会革新ゾーンプロジェクト」につきましては、2021年度に御所野遺跡の世界遺産登録に向けた取組を現在進めています。そういった取組や、あるいは再生可能エネルギー、そしてアパレル産業、漆等々の地域の資源がたくさんある地域ですので、こういったものを生かして産業振興や、それから豊かな生活につなげていく、こうした取組を進めていきたいと考えています。

そして、文化・スポーツの関係では、皆さん御承知のとおり昨年は釜石でラグビーワールドカップが開催されましたし、今年も東京2020オリンピック・パラリンピックもあります。そして、岩手にはオープニングで披露いただいた民俗芸能、多彩な民俗芸能もあります。こうした文化・スポーツを生かしたまちづくり、県政の推進をしっかりと進めていくプロジェクトを展開していきたいと考えています。

最後に少し聞きなれない言葉のプロジェクトをご紹介します。「人交密度向上プロジェクト」ということで、例えば岩手に観光に来ていただいた方あるいは関東圏や関西圏にお住まいであるものの、岩手ファンの方々、こういった方々を「交流人口」や「関係人口」という呼び方をしますけれども、こういった岩手に関わる人を増やして、将来の定住や地域振興につなげていこうとするプロジェクトを推進していきたいと考えています。

具体的な取組例の紹介をさせていただきますと、現在、県では「遠恋複業課」という事業を実施してしています。これは首都圏の人材と、岩手の企業のマッチングを、遠距離恋愛に見立てて推進するという取組でして、成果が出てきているところでございます。

また、「いわてWalker」という雑誌を昨年2月に発行しましたが、皆さん御承知の「のん」さんに表紙を飾っていただき、岩手の暮らしあるいは仕事、魅力について親しみやすい内容で紹介したものです。ちなみに、来月第2弾も作成・発表予定ですので、皆さん楽しみにしていただければと思います。

最後になりますが、本日ご紹介した「いわて県民計画（2019～2028）」に基づき、県民一人ひとりの皆さんの幸福を高める取組をしっかりと進めていきたいと考えております。県民の皆様への御理解と御協力、それから御参加のほどを是非よろしくお願いいたします。御清聴ありがとうございました。（拍手）

スペシャルトーク

村上弘明氏

○司会 さて、皆さんは岩手県魅力発見PR動画「偉人局」を御存じでしょうか。いわて☆はまらいん特使、岩手県陸前高田市出身で、映画、テレビなどで活躍中の俳優、村上弘明さんが主演する動画です。現在は2本の動画が制作されておりまして、2本目の動画は昨年末に発表されたばかりです。監督は、奥州市出身で、希望郷いわて文化大使でもいらっしゃいます及川拓郎さん、1作目のアシスタント役は一関出身の志田友美さん、2作目のアシスタント役は矢巾町出身の工藤有紗さんとオール岩手で制作した作品となっております。

まずは、「偉人局」ショートバージョン、2作続けて御覧ください。

（偉人局VTR放映）

○司会 さて、皆様、いかがでしたでしょうか。皆様にはただいま「偉人局」のショートバージョンを2作続けて御覧いただきました。

こちらの「偉人局」ですが、村上弘明さんが「偉人局」の主任、1作目は原敬に扮しまして、そして2作目は田中館愛橘に扮しまして物語が進んでいました。県外の方はもちろんですが、県内の方にも改めて岩手の偉人、そして岩手の豊かさ、魅力を感じていただく、そんな動画になっているのではないかと思います。

さあ、それではいわて☆はまらいん特使、村上弘明さんをお呼びしましょう。どうぞ皆様、大きな拍手をお願いいたします。（拍手）

村上さん、こんにちは。

○村上弘明氏 こんにちは。

○司会 よろしく願いいたします。

○村上弘明氏 よろしくお願ひします。

○司会 ただいま村上さんに御登壇いただきましたが、実は本日は2作目のアシスタントを務めてくださいました工藤有紗さんにもお越しいただいておりますので、ステージに御登壇いただいてもよろしいでしょうか。どうぞ皆様、大きな拍手でお迎えください。（拍手）

では、有紗さん、せっかくですから前の方へどうぞ。工藤さんは、映画というか、このような動画に出演するというのは何回目だったのでしょうか。

○**工藤有紗氏** 今回が初めてでした。

○**司会** 初めてだったのですね。

○**村上弘明氏** 初めて、頑張りましたね。

○**司会** なるほど。では、この「偉人局」のお話が来たときはどんなお気持ちでしたか。

○**工藤有紗氏** ふるさどである岩手の作品に参加させてもらうことは夢の一つでしたので、本当にすごく嬉しかったですし、村上さんとの共演だったので、すごく緊張しましたが、私にとって昨年が一番幸せな出来事でした。

○**司会** 昨年が一番の大きな幸せな出来事。

○**村上弘明氏** 光栄ですね。今日ご紹介したのは3分のショートバージョンでしたが、実際はもっと長いバージョンで、彼女も結構せりふが多かったのです。

○**司会** 私も拝見しましたが、結構長いせりふも多かったですよ。

○**工藤有紗氏** 先ほどはカットされていましたが、田中舘愛橘さんの「楽しむ前に疲れちまうべ」というせりふが本当に印象的で、それからは、緊張するときはそのシーンを思い出しながら今頑張っています。ユーチューブですと、ロングバージョンを見ることができるので、是非見ていただきたいです。

○**村上弘明氏** 私と共演して幸せを感じたという、皆さんもそれで幸せを感じることができれば、とても嬉しいですね

○**司会** 素晴らしいことですね。

改めて、今回「偉人局」に出演するに当たって、岩手の魅力、岩手生まれの岩手育ちでありながらたくさん感じたのではないですか。

○**工藤有紗氏** まだ私が知らない岩手の魅力は、本当にもっともっとあると思うので、勉強して、それを県外の方々にも伝えられるように頑張っていきたいと思います。

○**司会** ありがとうございます。では、工藤さんにはそちらのお席で引き続きフォーラムをお楽しみいただきたいと思います。ありがとうございます。どうぞ皆様、温かい拍手をお送りいただきたいと思います。(拍手)

さて、昨年工藤さんを一番幸せにしてくださった村上さん、では御着席をいただきまして、これよりは「偉人局」についてお話を伺っていきたいと思います。「偉人局」、ただいまショートバージョン御覧いただきましたのが、その中で2役、「偉人局」の主任、そして

「偉人局」1作目では原敬を演じられていましたが、実際は1人3役、宮沢賢治も演じていらっしゃいますよね。

○村上弘明氏 最後の場面に宮沢賢治さんが出てくるのです。その役も僕がやっています。

○司会 3役を演じ分けるといのは、最初お話を来たときはどうでしたか。

○村上弘明氏 3役というの、どのような違いを出すかということが重要だと思いますが、主任と原敬は、別にそれは問題なかったです。テンポを変えれば良いだけです。一方、最後の宮沢賢治をどのように演じるか、原敬とそんなに時代が変わらないわけですから、テンポなど若干迷いましたが、服装で違いを変えました。

○司会 なるほど。

○村上弘明氏 雰囲気と服装です。

○司会 1人3役の見どころ、ここもまた楽しいところですよ。

○村上弘明氏 はい、そしてやはり御覧いただいてわかるように岩手の自然です。とても美しいです、改めて見ると。

○司会 私もそう思いました。本当にワンシーン、ワンシーンに出てくる岩手の風景、そこに普段私たちが気づかなかった魅力や豊かさが溢れていますよね。

○村上弘明氏 そうですね。

原敬という人は、1856年生まれ、僕は1956年、ちょうど100年の違いなのです。

○司会 ちょうど。

○村上弘明氏 さらに言いますと、藤原清衡というのは1056年で、これは僕と900年。藤原清衡が生まれて800年後に原敬さん、これは田中館愛橘さんもそうなのです。お二方とも1856年生まれ。さらに作人館で同じ教育を受けているという、その100年後に大分違いますけれども、私が生まれたという。そういうことなのです。

○司会 なるほど。偉人とのつながりが深いわけですね。

○村上弘明氏 そうですね。原敬さんでいいますと、やっぱり初めての平民宰相、爵位を固辞し続けたという、そこには清衡公の「あまねく皆平等なり」という供養願文に残されているように、人は皆平等なのだ、厳しい自然のもとには平等なのだというのが原敬さんにも受け継がれていたのではなかろうかという、そんな気がするのです。

○司会 なるほど。

○村上弘明氏 あとは、戊辰戦争ってありますよね。

○司会 はい。

○村上弘明氏 幕末の生まれで、原敬は 12 歳の頃に敗者になっているわけです。盛岡藩のおじいちゃんが名家老と言われた人ですから、そのお孫さんで、ある意味何不自由なく暮らしてきた者が薩長連合、官軍にやられて 12 歳にして非常な屈辱を感じていると思うのです。

○司会 人生がそこでがらりと変わって。

○村上弘明氏 その敗者になった思いや、屈辱的な思いが、原敬さんの今後の人生を変えたと思うのです。後々中国や満州に対して、ある意味対等な貿易国として相手を思う、他者を思う気持ちというのは、やはりそこから生まれてきたのではないだろうか。弱腰外交というふうに言われて揶揄されましたが、それは岩手の県民性、そして藤原清衡、もっと言うとその昔から綿々と続いてきた岩手の県民性ではないかなと思います。自然の下では、みんな一致団結して結束力が強まる。そして、敵味方関係なし、とにかくそんなこと言っている場合ではないのだ、人間は皆一緒になって支え合い、助け合い、そういうことをしなければ人間、人類は生きていけないのだ、ということをこの厳しい自然のもとで培ったというか、私たちの DNA の中にはそれが深く刻み込まれていると思うのです。

ですから、動画を通してでも良いのですが、全国に発信するというか、支え合う、助け合うことが重要だと思います。厳しい自然の下では敵味方関係ない、ミサイルを発射している場合ではないだろうという感じですよ。

○司会 そうですね。

○村上弘明氏 岩手から発信すべきものの一つだと思います。

○司会 なるほど。今原敬について村上さんとお話ししていると、本当にどんどん、どんどん溢れるように原敬のエピソードが伺えますね。

○村上弘明氏 田中舘愛橘さんについてもお話したほうが良いですね。

○司会 そうなのです。やはり聞きたいですよ、皆さんも。

○村上弘明氏 田中舘は二戸市出身で、一望できるような二戸の町並みがありましたけれども。

○司会 私、あそこ大好きです。

○村上弘明氏 素晴らしいですね。

○司会 ええ。

○村上弘明氏 想像してみてください。田中館愛橘さんは、僕より 100 年前に生まれたわけですから、100 年前の二戸を一望するあそこはどんな状況になっていたか。恐らく建物がそんなでない状況、鬱蒼とした自然に囲まれた状況だったのではなかろうかと思うのです。

○司会 ええ。

○村上弘明氏 田中館愛橘さんは、恐らくその時代、詳しくはわかりませんが、冷害などで食うに食えない困った時期を過ごされたはずだと思っています。そんな中でも自然の美しさ、夜になるとやっぱり星の美しさ、そういったものを見て、星と今の環境、自分たちの置かれた立場をいろいろ見て、何か助ける方法はないだろうか、救う手立てはないだろうか、というものが、科学を探求することに駆り立てたのではないだろうかなど、そういう思いをめぐらせながら撮影をしていました。

○司会 なるほど。確かに当時は、物理学を目指すという方は余り多くはない時代に物理学を専攻していますよね。

○村上弘明氏 電車もないですから、当時は。電車もないし、流通経路もないし、馬とか牛とかそういったもので、電車は途中から出来ました、二戸はまだ開通していなかったと思うのです。だから、入ってくる情報もそんなには多くなかっただろうし、その後作人館で学んだわけですが、そこで盛岡の人や様々な人たちの刺激を受けながらさらにいろいろな人たちが集まってくる。高校や大学には恐らく中央の方とか、山口の方とか、いろいろな人たちが先生として来ていたのではないかと思います。そういった異文化を吸収しながら、今度はさらに海外はどうなのだろうと行って海外に何度も何度も渡航して、学術研究の中で出席できることは出席したり、アインシュタインやキュリー夫人とか、そういった人たちとの一緒に学術会議で、それを何とか日本に反映できないかといったことに尽力した。後に湯川秀樹さんとか、ノーベル物理学賞を受賞された日本人の研究者ががたくさん輩出されますが、田中館愛橘さんは、まさにその礎をつくった、下地をつくった人と言っても過言ではないと思います。

○司会 すごくグローバルな視点を持った方だったんですね。

○村上弘明氏 そうですね。

○司会 私は、田中舘愛橘さんの作品の方で気になったのが、村上さんが岩手訛りで演技をしていらっしやった点です。

○村上弘明氏 はい、そうですね。2作目の田中舘愛橘さん、あの人も白髪なのです。晩年の写真をちょっとまねてメイクしたのですけれども、そのメイク時間、何と2時間かかったのです。

○司会 2時間。

○村上弘明氏 毎日2時間かけて髭をつけて、髪の毛を白く染めて、どうやって田中舘愛橘さんと最初の原敬さんの違いを出そうか、これが一番の問題でした。

○司会 実は、ここだけの話、撮影の方はお天気に恵まれなかったそうですね……

○村上弘明氏 恵まなかったのです。

○司会 2時間かけてメイクをするなど、セットも大変だったのではないですか。

○村上弘明氏 そうですね。僕は、それこそ2014年からいわて☆はまらいん特使をやらせていただいているのですけれども、その主な活動としては日本全国のデパートでの岩手物産展でのトークイベント、そしてもう一つが今のような動画撮影、岩手の魅力を全国に発信するという動画の撮影ですが、これは今までトータル6年目になります。

○司会 はい。

○村上弘明氏 それが毎回、初年度からずっと台風とか雨に祟られているのです。

○司会 6年間ずっとというのはなかなか……

○村上弘明氏 ずっと祟られていますね

○司会 どなたか強力な雨雲を連れてくる……

○村上弘明氏 犯人捜ししていると撮影できないので。

○司会 でも、何か雨が降るからこそ見られる風景にも良い部分もあるのではないですか。

○村上弘明氏 そうなのです。原敬さんがアシスタントの彼女にいろいろ話している時、田園風景がありまして。その後ろに本当は岩手山が見える予定だったのです。雲がずっと

避けるのを待っていたのです。いくら待てども白いものが、もやがかかって、しょうがなく、あれは雨が降り次ぐ合間を縫って撮影したのです。

○司会 でも、雨が降っているからこそ黄金色が際立っていて、本当に風景が魅力的で。

○村上弘明氏 どこかで僕が言ったのを聞いていたのではないですか、それ。

○司会 聞いていないのです。いや、私……

○村上弘明氏 僕が今言おうとしたこと……

○司会 本当ですか、すみません。

○村上弘明氏 そうなのです、あの黄色がすごく際立つのですよね。そうすると、見ようによってはあれが金札米というか、金のようにも見えてくるわけです。

○司会 確かに。今ふと見えたのですが、私の視界に入ってきた知事のネクタイも今日は金色の風の金色。

○村上弘明氏 ああ、金色ですね。まさにそうですね。白に金色というのは、やっぱり映えるのです。

○司会 そうですね。

○村上弘明氏 白いシャツに金色、映えています。

○司会 本当に。

○村上弘明氏 そういったこともあって、人がいろいろ画策したことを超えるものを天候が提供してくれるというか。

○司会 なるほど。

○村上弘明氏 動画撮影に関しても、岩手の天候はいろいろ後押ししてくれているのではないか、そんな思いを持って撮影に臨んだこの6年間でした。

○司会 本当にショートバージョンでは感じられない良さが本編の方にありますので、ぜひ後ほど御覧いただきたいと思います。

○村上弘明氏 ぜひ見てください。

○司会　そして、先ほど村上さんの方から「いわて☆はまらいん特使」、いろんなところに出向いて岩手の魅力をPRしていらっしゃるということをお伺いしましたが、実際にはどんなどころに行っていていらっしゃるのですか。

○村上弘明氏　東京日本橋、あるいは千葉、高島屋、名古屋、広島、そういったところで物産展が行われるときには僕がお伺いして、食品の魅力、岩手の魅力、そして僕の思いのたけをトークイベントで語らうという、そういう機会です。

○司会　村上さん御自身は、今現在東京にお住まいということで、外から見た岩手の魅力というのもたくさん感じることはないですか。

○村上弘明氏　やっぱり自然です。偉人局でも御覧いただいたとおり自然の魅力。東日本大震災津波もありましたが、時には厳しいこの自然が私たちに教えてくれるのは、人は一人では生きてはいけないということ。お互いが支え合って、助け合って、そうすることによって初めて活路が見出される、生き抜いていけるのだということを教えてくれる。だから、相互扶助の精神がこの厳しい自然の中で培われてくるという、それが岩手県の県民性だと思っています。

○司会　なるほど。DNAのどこかにそういうものが刻み込まれているような……

○村上弘明氏　深く刻まれていると思います。

○司会　なるほど。

○村上弘明氏　ですから、先ほども言いましたが、900年前に藤原清衡公が供養願文の中で「あまねく皆平等なり」。それは、北は青森の外ヶ浜、十三湊、南は福島の白河、そこから奥大道を築いて東北6県のトップ、頂点に立つ人間が「あまねく皆平等なり」と供養願文の中に残すわけですから。900年も前にですよ。これは信じられないことです。その後織田信長は、俺は神様だ、天皇を超える神になりたい、とのたまうわけですから、そのずっと前のことですから。やはりいかに自然との向き合い方の中で、人間は一緒にならないと生きてはいけないのだということを訴えかけ、そしてそれがみんなの平和のもとなのだ、富める者、地位の高い者、そういうものは関係なしにみんな一緒にやろうではないですかということだと思います。そして、社会的に弱い立場の者をすくい上げる。いつ自分がそういうふうな立場になるか、相身互いという精神が岩手のDNAの中に刻み込まれているのではないだろうか僕が解釈しています。

○司会　岩手の気候風土が作った岩手の県民性みたいなものを、常に外から感じていらっしゃるということですね。

○村上弘明氏 感じます。

○司会 そして、物産展によく行かれるということなのですから、実際に来た首都圏の皆様が岩手に対するイメージや反応というのはいかがなのですか。

○村上弘明氏 どうなのでしょう。僕には「岩手行きます」、「岩手、この間行ってきました。素晴らしいところです」と言われることが多いですかね。

少し前までは「岩手は日本のチベット」とか揶揄された時期がありましたが、これはこれで僕は別に悪いことではないと思っています。神秘的な意味合いというか、人が足を踏み入れたことのない、反対に言えばまだまだ可能性に満ちている地域だということです。

先ほどもプロジェクトにありましたけれども、沿岸部、そして県北、県南、それぞれ文化の違いがありますよね。

○司会 確かに岩手、広いですからね。

○村上弘明氏 そうですね。やはり食べ物で言うと、暖流と寒流、親潮と黒潮がぶつかる三陸海岸、ここの魚介類は世界3大漁場の一つと言われるだけに素晴らしく恵まれていると思います。そして、北上山地を越えると、北上山地の底から流れ出る豊富な養分で作られた大地、そこからとれる穀物も素晴らしい。それこそ坂上田村麻呂の蝦夷征伐の名目はひょっとしたらここの豊穡な土地、肥沃な土地を欲しがのためにここまで来たのではないかとも思うのです。時の日本の中心地、京都の人間がうらやむ肥沃な、豊富な土壌、穀倉地帯、それが岩手にあると僕は解釈しているのです。

○司会 なるほど。県外に暮らしているからこそ見える岩手の見方というのがすごく村上さんから伝わってきて、もっともっと「偉人局」について、そして外から見た岩手についてお話を伺いたいと思うのですが、実はこの後村上さんにはクロストークにも御参加をいただきますので、そこでまたたっぴりとお話を伺ってもよろしいでしょうか。

○村上弘明氏 ええ。もうほとんどしゃべり尽くしましたけれども。

○司会 本当ですか。この後もたっぴり時間用意していますので、是非またそちらの方でもよろしく願いいたします。

○村上弘明氏 よろしく申し上げます。

○司会 それでは、いわて☆はまらいん特使、村上弘明さんにどうぞ皆様、大きな拍手、お願いいたします。(拍手)

ありがとうございました。

なお、皆様、先ほど「偉人局」のお話をさせていただきましたが、今回はショートバー

ジョンを御覧いただきましたが、「偉人局」の本編、メイキング映像は本日配信しております資料のQRコードからも御覧をいただくことができます。ぜひ御覧ください。

それでは、ここでステージ転換を行いますので、少々お時間を頂戴いたします。

クロストーク

俳優 村上弘明氏

釜石シーウェイブスゼネラルマネージャー 桜庭吉彦氏

編集者 佐藤利智子氏

岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」 高橋亜美氏

岩手県知事 達増拓也

(司会) 千葉星子

○司会 それでは、皆様、お待たせいたしました。ただいまより「岩手で暮らす幸せ、岩手とつながる幸せ」をテーマにクロストークを始めます。

まずは、本日のゲストをお呼びいたしましょう。

岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」前代表、岩手大学人文社会科学部3年生、高橋亜美さん。(拍手)

高橋さんは、花巻市の出身です。

続きまして、佐藤作戦会議室代表、コピーライターの佐藤利智子さんです。(拍手)

佐藤さんは、紫波町出身でいらっしゃいます。

続きまして、いわて☆はまらいん特使、俳優の村上弘明さんです。(拍手)

先ほども御紹介をいたしました、村上さんは陸前高田市出身でいらっしゃいます。

続きまして、釜石シーウェイブスラグビーフットボールクラブゼネラルマネージャー、桜庭吉彦さんです。(拍手)

桜庭さんは、秋田県潟上市出身でいらっしゃいます。

そして最後は、達増拓也岩手県知事でいらっしゃいます。(拍手)

達増知事は、盛岡市出身でいらっしゃいます。

それでは、以上の5名の皆様と私、千葉星子で進めてまいります。

それでは、皆さん、よろしく願いいたします。(拍手)

多彩なゲストの方がステージの上には揃っていますので、早速いろいろお話を聞いていきたいと思いますが、最初は桜庭さんにお伺いしたいと思います。

まずは、昨年ラグビーワールドカップ、お疲れさまでした。

○桜庭吉彦氏 ありがとうございます。

○司会 もう皆さんも御存知だと思いますが、大変な賑わいでしたね。

○桜庭吉彦氏 そうですね。日本代表の活躍もありましたが、たくさんの方にスタジアムに足を運んでいただき、そして伝統国と同じような雰囲気でも試合を盛り上げてくれたと思います。

○司会 大変盛り上がった岩手のラグビーについていろいろお話を伺っていきたくと思いますが、その前に桜庭さん御自身は秋田県出身ということで、秋田工業高校を出て、その後新日鉄釜石に入社されたのですね。

○桜庭吉彦氏 はい。秋田から釜石に来るに当たって、当時新日鉄釜石ラグビー部で監督をされていました松尾雄治さんに声をかけていただいて、当時は釜石日本一を5連覇しておりましたので、是非一緒に日本一を目指そうと、一緒にラグビーをしようということで、私もラグビーを松尾さんと是非一緒にやりたいと思って釜石に行くことを決めました。

○司会 それは何年ぐらい前ですか。

○桜庭吉彦氏 もう34年前になります。

○司会 34年前。

○桜庭吉彦氏 ただ、釜石に来たら松尾雄治さん辞められておまして…。けれども、松尾雄治さんに声をかけていただいたからこそ、ラグビーをはじめ、いろいろな経験ができたかなと感謝をしています。

○司会 桜庭さん御自身は、ワールドカップをなんと3度も経験していらっしゃる。

○桜庭吉彦氏 はい。1987年からラグビーワールドカップが開始されましたが、その第1回目から1999年まで、1回選ばれなかったことがあります。計3回、おかげさまで幸運にも参加させていただきました。

○司会 では、日本代表としては16年間続けてジャパンを背負っていたと。

○桜庭吉彦氏 はい。

○司会 やはりプレッシャーとか、体づくりとか、皆さんが体と体がぶつかり合うあの瞬間を見ると、相当な体づくりをしていらっしゃるのではではないですか。

○桜庭吉彦氏 そうですね。私も身長192センチあるのですが、世界の同じポジションの選手はもう2メートルを超す選手と一緒にやっておりましたので、なかなか正面からぶつかってしまうとやっぱり勝てない部分もありますので、そこは日本人の俊敏さですとか、あるいは低さだとかということに大事にしてプレーして、かつしっかり体づくり、あるいは休養だとかというものにも気をつけて、何とか長く代表、あるいは選手生活を送ることができたと思います。

○司会 なるほど。そして、御自身もラグビーを長年続けていらっしゃって、その釜石で、御自身がやっている釜石でラグビーワールドカップが開催されると聞いたときはどのようなお気持ちでしたか。

○桜庭吉彦氏 まさか釜石でラグビーワールドカップというのは、選手時代は当然想像できなかつたと思います。ただ、昨年9月25日、釜石でフィジー対ウルグアイ行われたときというのは、一人のラグビー関係者として非常に感動しました。あの日はまさに釜石が世界の中心になったと思いますし、復興の姿を世界に発信すると同時に、感謝の気持ちを世界に発信することができたと思います。

○司会 来場された人数もすごいですよ、この日。

○桜庭吉彦氏 そうですね。1万4,000人以上の方にスタジアムに足を運んでいただきましたし、海外の方も多く足を運んでいただいたと思います。これも、選手あるいは関係者だけではなくて、ボランティアを含めたいろいろな皆さんの思いというのが、あの素晴らしい雰囲気を作ったのではないかと思います。

○司会 地域の皆さんもワンチームになっていた感じでしょうか。

○桜庭吉彦氏 ワンチームでしたね。ワールドラグビーの関係者の皆さんも、12の開催都市の中で釜石鶴住居復興スタジアムが一番愛のある美しいスタジアムだと評価しておりました。

○司会 すごい。知事も隣で「うん、うん」と頷いていますが、その会場の中で一番だという声をいただいたというのは嬉しいですね。

○達増知事 キャラクター賞も取りましたしね。

○桜庭吉彦氏 そうですね。ワールドラグビーの中でキャラクター賞という賞をいただきました。その時に、ワールドラグビーの関係者を含めて、大きな会場での授賞式だったのですが、皆さんのスタンディングオベーションが他の受賞チーム、あるいは受賞者よりもひととき大きな拍手、そしてすばらしい雰囲気の中で「釜石、おめでとう」という雰囲気があったと思います。

○司会 このキャラクター賞というのは、日本語に直すと品格賞にも値するという、釜石市がこの賞に表彰されたというのは本当に大きなことですよ。

○桜庭吉彦氏 そうですね。東日本大震災津波からの復興を地域が一つになってスクラムを組んで取り組んできたということがやっぱり評価されたということだと思います。

○司会 なるほど。一方で10月13日のナミビアーカナダ戦は、残念ながら台風の影響で中止になってしまったのですが、その後飛び込んできたニュースに私、とても驚きました。

○桜庭吉彦氏 そうですね。

○司会 選手たちのとった行動。

○桜庭吉彦氏 カナダの選手が、本当であれば試合が出来なくなって落ち込む場面だと思うのですが、自ら申し出てくれて、被災した方のお宅に足を運んで泥かきのボランティアをしてくれたということは、まさにラグビーの価値を高めるための結束、あるいは困った人に手を差し伸べるというような文化が彼らの行動によって、さらに価値を上げてくれたと思います。

○司会 被災した人だけではなくて、ニュースを聞いた皆さんにも希望を与えてくれるような、そんな大きな行動でしたよね。

○桜庭吉彦氏 はい、そうですね。

○司会 ラグビーの話で相当盛り上がってしまいましたが、高橋さんは今大学生、ラグビーは見ましたか。

○高橋亜美氏 テレビで拝見していました。

○司会 そして、御自身でも関係するアルバイトをされていたという。

○高橋亜美氏 はい。アルバイトの関係で、釜石のファンゾーンに行かせていただきました。その日は釜石での試合は無かったのですが、外国人の方や、地元の人たちがたくさんいて賑わっていて、岩手では今まであまりそういう光景を見たことなかったこともあり、岩手にとって、何か不思議と言ったら失礼かもしれないのですが、すごく珍しい、すごく賑わいののある光景だったと感じました。

○司会 あの熱気をアルバイトをしながら、学生さんだからこそその視点で感じてくださっていたのですね。

佐藤さんもやっぱりラグビーは御覧になられましたか。

○佐藤利智子氏 ファンゾーンで応援していました。

○司会 ファンゾーン、すごい人でしたよね。

○佐藤利智子氏 すごかったですね。少しビールを飲みながら、大歓声を上げていたので

すが、やはりラグビーワールドカップを見て一番心を打たれたのが、相手をリスペクトするという精神ですね。この精神については自戒することもありましたし、いろいろな国と国と、人と人とのつき合い方の基本になるのではないかなということも、ものすごく感じました。

○司会 なるほど。ありがとうございます。

さて、次は村上弘明さんにお話を伺っていきたくと思いますが、陸前高田市出身、お幾つぐらいまで陸前高田市にはいらっしやったのですか。

○村上弘明氏 そうですね、高校卒業までですから、18歳までですかね。

○司会 18歳までいらっしやって、その後は東京に出て俳優を。

○村上弘明氏 いいえ。一応医学部を目指して仙台で浪人していたのですね。

○司会 医学部を目指していたのですか。

○村上弘明氏 ええ。何年か浪人していました。何年とは、ここでは述べませんが、何年か。

それで、仙台の予備校に通う道すがら、そこに陸前高田にはなかった名画座が幾つもありまして。休みのときに、ちょっと息抜きに見てみようかなと思って入ったら、これがまた面白いわけですよ。それで、もう次の日からいろいろな名画座のはしごを始めまして、気がついたらもう年間70本、80分見ていましたかね。

○司会 年間でそんなに。

○村上弘明氏 はい。これでは医学部に受かるわけがないので、ある意味映画に関する仕事を何かやってみようかなと。思い立ったのが、やはり仙台でした。

○司会 そうですか。

○村上弘明氏 仙台という街は、僕にとっては何か人生の岐路というか、進む方向を変えていった街なのです。

そういったことで、親にはそれは言えなくて、映画の道に進むなんて賛成してくれるはずはないわけで、東京の大学に行かせてくれということで東京に行きまして、東京にはもっとも名画座があるわけですよ。そこで、大学に通いつつ、名画座をいろいろと観ました。「ぴあ」というガイドブックがありまして、それでどこに名画があるか全部僕の頭の中で把握して、今度はこのくらいの時間だったらもう見られるということで、大体その当時の地下鉄を全部把握していましたね。

○司会　すごい。もう本当に魅力に取りつかれてしまったわけなのですね。

○村上弘明氏　取りつかれてしまいました。

それで、そのときに一緒に名画座通いを始めていた、僕と一緒にしていた友達が映画のオーディションに僕の写真を応募して、それがきっかけでプロデューサーにスカウトされてこの世界に入りました。

○司会　そういう縁でこの世界に。

○村上弘明氏　ええ、そうなのです。この世界というと、私の世界ですからね。

○司会　ええ、もちろんです。もちろんです。

俳優として活躍をされて、そして岩手出身ということで、先ほどの偉人局のトークの中にもありましたが、県内外に岩手の魅力をPRするといったこともされていますし、本当にいろんな取組をされていますよね。去年は、三陸防災復興プロジェクト、こちらにも参加をされて。

○村上弘明氏　そうですね。オープニングでは司会というか司会助手みたいなことをやらせていただきましたし、クロージングではストーリーテラーをやらせていただきました。それで、クロージングは陸前高田で行ったのですけれども、その後ちょっと高田の街中を見たいなと思ったのですが、次の仕事があってその日のうちに釜石に入って打ち合わせをしなければいけなかったのです。ですので、終わった瞬間に、挨拶も早々に釜石に向かったわけです。そこでびっくりしました。今は三陸道があるのですね。子供の頃、陸前高田から釜石大観音を見たりするには、もうえらい時間がかかっていたのですよ。明らかに2時間近くかかったと思います。それが30分ちょっとで行けてしまうのですからね。

○司会　速さに驚いたのではないですか。

○村上弘明氏　びっくりしましたね。やっぱりこの道路というのはすごいなと思ひまして、これはもう釜石が遠いところだと思っていたら、すぐそこ、隣町ぐらいの感覚ですよ。

○司会　そうですね。30分だと、それぐらいの感覚になりますよね。

○村上弘明氏　だから、道路というのはそうなのですよね。そして帰りは釜石から花巻に向かう

釜石道を通って帰ったのですが、これも新たにできた道路で速いのですよね。宮古からは盛岡につながる道路もできているし。

○司会　そうですね。

○村上弘明氏 そこで僕は考えたのですが、まず、沿岸部と内陸部の文化の違いが明らかにあると思うのですね。気候も風土も全然違う。そして、道路ができることによって、この沿岸と内陸のいろんな文化が混じり合って、さらに高みに行けるのではないだろうか。

あるときIBCのディレクターの方が、「村上さん、この間陸前高田で新鮮なカキを食べましたが、本当に涙が出るほど美味しかった」と言うのです。僕は沿岸部出身の人間が、幾ら新鮮なカキを食べても、涙を流したというのは見たことも聞いたこともありません。だから、新しい価値観を発見する、これは内陸の人なのかなという。内陸にできなかったことをむしろ沿岸部がやって、沿岸部で気がつかなかったことを内陸の人が発見すると、こういう相互作用の中で高めていくということがこれからどんどん、どんどん進んでいてほしいなと思います。

願わくは、釜石や宮古だけでなく、気仙郡と内陸の道路についても是非つなげてほしいと思います。

○司会 新たな道路ができたことでとてもアクセスが良くなって、文化、人との交流も活発になる、という村上さんの熱いトークがありましたが、桜庭さん自身も同じように感じていらっしゃいますか。

○桜庭吉彦氏僕は釜石に来るとき、松尾雄治さんからは、釜石は東北の上海のように賑やかで、そしてアクセスが良い街だと聞いていました。しかし、実際には秋田から5時間かかりました。

○司会 それは、大移動ですね。

○桜庭吉彦氏でも、今は道路が良くなって3時間で秋田から釜石に行けますので、本当に道路の大切さ、そして利便性、また人の交流が道路、インフラによって生まれてくるということを実感しています。

○司会 ラグビーの試合がある時も、本当に移動しやすくなったのではないですか。

○桜庭吉彦氏そうですね。以前は大変苦勞しましたが、今はもう本当に。例えば遠征に行くのにも、釜石に遠征に来るのにも、非常に便利になっていると思いますね。

○司会 そうですね。

ところで、少しラグビーの話に戻させていただきますが、にせつかく2試合目が残念ながら中止となった件、もう少しお聞かせいただけますか。

○桜庭吉彦氏そうですね。やはりカナダ対ナミビアが中止になってしまったことは非常に残念でした。是非この試合を再び釜石で再戦していただきたいと思います。知事、いかがですか。(拍手)

これは、多くの日本の皆さんが、是非やってくれと、絶対行くからとたくさんの方がおっしゃっていただいております。

○達増知事 私のところにも多くの人たちのやりたい、やろう、やってほしいという声が届いておまして、これはもうやらないわけにはいかないような状況になっているかなと思います。

○桜庭吉彦氏 皆さん、いかがですか。拍手をお願いします。(拍手)

○司会 大きな拍手が湧き上がりました。

○達増知事 素晴らしいですね。今日のフォーラムの一つの成果として是非前向きに検討していきたいと思います。

○司会 桜庭さん、力強いお言葉をいただきましたね。

○桜庭吉彦氏 力強いなんてものではないですね。

○司会 そして、お隣の村上さんも嬉しそうに強くなぞいていらっしやいましたね。

○村上弘明氏 はい、そうですね。ラグビーというのはやはり体力勝負ではないですか。どうしても体の大きい西洋人には日本人、アジア人は敵わないのではないかという固定観念を持っていたのですね。

○司会 確かに。

○村上弘明氏 ですから、今回は決勝リーグに行ったことが本当に驚きでした。アイルランドなど優勝候補と言われるような競合を次々と破って決勝リーグに進んだこと。僕は、こんなに凄いことが生きていううちに起こるものだろうか。例えるなら100メートル競走で金メダル取ったようなものですよね。

僕は、勝ち抜いていった頃からラグビーを見るようになりましたが、見かけただとこれは本当に日本人なのかという人たちがたくさんメンバーになっていますよね。当初は海外の人たちで結成されたチームで、これはどうなのかな、と思っていたところも少なからずありましたが、今は多様性の社会ということで、いろいろなものを受け入れるきっかけになるのではないだろうかと思いますね。むしろ、彼らの血が日本のチームに混ざり合うことで、そこにさらに日本人の緻密さ、機動性を注いでいければ、もっともっと強くなる可能性のあるチームができるのではないかと僕は期待しています。

○司会 ありがとうございます。

桜庭さん、釜石は本当にラグビーの街ですからね、県民の皆さんの注目も集まっている

と思いますので、私たちもラグビーを応援しようという気持ちがさらに増えていますので、今シーズンも頑張ってください。今月も、まだ試合ありますよね。

○桜庭吉彦氏 次の日曜日に東京の方で今シーズン最後の試合、清水建設との試合がございます。

○司会 ありがとうございます。皆さん一丸となって応援しましょう。

さて、ここからは佐藤さんにもお話を伺ってきたいと思います。佐藤さんは「地から」という岩手の食を応援する雑誌を出版されており、また県の広報紙「いわてグラフ」の編集にも協力されていらっしゃるんですね。県内の取材を通して、岩手の魅力を本当に肌で感じていらっしゃると思いますので、いろんなエピソードを伺ってきたいと思います。まず食のジャンルについてお伺いします。この分野は岩手県もとても活性化されてきているなと感じますが、いかがでしょうか。

○佐藤利智子氏 そうですね。特に若手の農家さんが凄く頑張り始めているということを実感してまして、岩手は食料自給率も 100%を超えている数少ない県ですが、生産している作物も非常に多彩で、特に私が取材に行くところは少し個性的な農家さんが多いですね。

○司会 少しといいましたが、実際はかなり個性的なのではないでしょうか。

○佐藤利智子氏 はい、そうですね。しかも苦労をいとわない非常に熱い気持ちがないと正直作れないのではないかとこのものを作っている方もいますね。例えば関西が主流のレンコンを、岩手で作っている農家さんがたった一人います。

○司会 レンコンを岩手で。

○佐藤利智子氏 そうです。

○司会 知事も今隣で驚かれています。御存じなかったでしょうか。

○達増知事 ええ、知らなかったです。

○司会 レンコンは、私も初めて伺いました。

○佐藤利智子氏 岩手でたった1人、そんな男性がいるのですが、本当に泥の中からレンコンを一つ一つ掘り出して、腰に来るわ、体に来るわ、相当苦労をいとわない人でないとやれないという、そういう作物をつくっている人がいます。

また、御存知の方も多いと思いますが、山地酪農牛乳といって、高地の厳しいところに乳牛を放牧して、健康的に牛乳を搾っている酪農家もいらっしゃいます。

さらに、二戸の馬場園芸さんというところでは、冬にホワイトアスパラガスを作っていますが、やはり特化した野菜づくりにより深く進んでいる感じの農家さんがある一方で、地域ぐるみと申しますか、野菜を育てて加工して販売をするだけではなくて、農業体験プログラムを取り入れたり、地域ぐるみで地域活性化に結びつくような取組をしているところもありますね。

先日（司会の）千葉さんもいらっしゃった一関市の京津畑地区の食の文化祭というイベントも、あれもやはり地域の食の魅力を発信する地域ぐるみの活動でしたよね。

○司会 確かに。廃校になった学校で、11月に開催されていますが、1,000人近くの方が、県内だけではなく首都圏からも足を運んでいらっしゃいました。また、地元の人たちが家で食べているお料理を提供するという。おもてなし料理も含まれていましたが、普段自分たちの地域で食べられているお料理を来場者も食べられるというのはなかなか無い機会でしたよね。

○佐藤利智子氏 そうですよね。卵焼きが出てきたり。

○司会 ええ。イベントに行って卵焼きを食べるというのも珍しいといえば珍しいですよ。でも、これがなんとも落ちつくのですよ。

○佐藤利智子氏 そうなのですよ。

○司会 でも、こうやってお話を伺っていると、佐藤さんの場合は、素材はもちろんなのですが、人にもフォーカスを当てていらっしゃるのですね。

○佐藤利智子氏 はい、そうですね。作る生産する方々がいることが大前提ですが、作ったものを消費者につなぐ、つなぐ人というのがいないと食は流通していかないということがありまして、作り手でも、先ほどご紹介したような苦勞を全く厭わない生産者もいれば、音楽を通じて農業を発信している方がいたり、例えばクラフトマーケットを通じて農業を発信していたりとか、今までとは違う視点で農業を知ってもらう、理解してもらう、自分たちの野菜を買ってもらうというアプローチをし始めている若者が多く出てきているように感じます。

○司会 たくさんの若い世代が新しい視点で頑張っているといえるのですね。また、いまお話がありました、クラフトマーケットとか、そうしたイベントの告知を耳にする、目にする機会が最近増えているような気がします。そうしたイベントをを主催するのも農家さんだったりするのですか。

○佐藤利智子氏 そうなのです。自分たちの作った野菜やお米をどのように消費者に届けようか考えた時に、クラフトマーケットと組み合わせることで、これまで知らなかった、出会えなかった層を取り込んで、実際にそこで食べてもらって買ってもらう、新たな顧

客を開拓していくという、さらに今まで知らない人と接点を持つアプローチの仕方が、今とても広がっていると感じています。

○司会 私もクラフトマーケットに何度か足を運んだことがあります、行って驚くのが、食だけではなくて、工芸品とか伝統的なものがたくさん売られています、若い世代がとても多いですね。

○佐藤利智子氏 そうですね。工芸品の分野でも若い世代の方々が増えてきていますね。が、先日、海外経験が長い、グッドデザイン賞の審査員の方とお話する機会があったのですが、日本は海外から見ても多くの手仕事が継承されている数少ない貴重な国だという話がありまして、伝統的な工芸と言えばヨーロッパなどがすぐ思い浮かぶのですが、ヨーロッパでも後継者不足というのはやはり深刻で、大企業は資本があるから守っていけるけれども、そうではないところは消滅しつつあるというのです。しかし、日本では、全国各地で、確かに規模は小さいかもしれないですが、多彩な手仕事、工芸が受け継がれている。それは、世界的に見ても価値のあることだとおっしゃっていました。

○司会 なるほど。そして、若い方たちがそうやって交流していくことによって、またそこから生まれる新しい分野というものも出てきているそうですね。

○佐藤利智子氏 そうですね。県南地域で漆器や、箆笥、鉄器などといった様々な工房を巡ることができる「五感市」というイベントが開かれていたりします。

○司会 「ゴカンイチ」というのは、どういう字を書くのですか。

○佐藤利智子氏 五つの感じる市です。市場の「市」です。

普段はものづくりの現場をなかなか見ることができないのですが、その日だけは実際に工房の中をじっくり見て回って、ものづくりの体験ができたりします。家族連れでいらっしゃる方も多いので、子供たちがものづくりに触れる機会になっていたり、その工房の物を買うきっかけになっていたりなど、新しいアプローチの仕方が出来ているような感じがします。

○司会 こちらもまた注目のイベントなのですが、先ほど海外の方がおっしゃっていたという話を耳にして思い出したのが、佐藤さん御自身も「モノラボン」という、新しいワードなので、「えっ」と今興味を持たれた方もいらっしゃると思いますが、こちらの方ではどんなことをされていらっしゃるのでしょうか。

○佐藤利智子氏 「モノラボン」というのは会社名なのですがけれども、その会社で「i w a t e m o」というブランドを立ち上げました。岩手県内の小さな工房と、フィンランドのプロダクトデザイナーの方お二人にコラボレーションをしてもらって商品を作っています。これまでは1つの企業と1つの海外デザイナーがコラボレーションするというのが一

般的だったと思いますが、やはり小さい工房だと、海外に行きたくても資本力やソフト、デザインなど、そういう力が弱いので、「i w a t e m o」というブランドの中でいくつかの小さな工房を1つに括って、まとめたブランドとして海外デザイナーのデザインを取り入れたものとして海外に発信しています。

○司会 実際にフィンランドなど北欧で岩手の工芸品というのはどのような評価を得ているのですか。

○佐藤利智子氏 「i w a t e m o」は海外としてはフィンランドのヘルシンキとスウェーデンのストックホルムの2カ所で初めに公開したのですが、海外のデザイナーがデザインしているものではあるけれど、なぜか日本的なものを感じると評価されています。そこがまた不思議なのですが、何か海外の人は和的な感覚をそのデザインや素材から感じるらしくて、とても興味を持ってくださいますね。

○司会 岩手の魅力を国内外に発信していく、まさに現在佐藤さんが取り組まれていらっしゃるんですが、知事、岩手の工芸品、食は世界的に見ても注目を浴びているのですね。

○達増知事 「i w a t e m o」の話は、関係している木工屋さんから話を聞いたことありますけれども、やはり全国有数、世界に通用するものが岩手の工芸品にはありますね。

○司会 本当に高い評価を得ている、だからこそ佐藤さんもそういう人を掘り起こして発信していきたいというお気持ち強いのではないですか。

○佐藤利智子氏 そうですね。岩手には、やはりまだまだ素敵な人や物、食べ物もそうですし、様々な魅力が溢れているので、そういうちょっとレアなところ、コアなところを深く掘り下げて発信できるといいなと思っています。

○司会 佐藤さんには、海外の話、そして若手の方たちが頑張っているという話を伺ってきましたが、高橋さんもまさに若い世代ということで、今大学3年生、岩手大学民俗芸能サークル「ばっけ」の前代表としてご活躍ですね。

○高橋亜美氏 はい。「ばっけ」について11月で引退したので、肩書的には前代表ということになります。

○司会 高校を卒業するときに、岩手に残るか、それとも出るかという、ちょっと一つ迷われるターニングポイントがあったと思うのですが、高橋さん御自身はどうか。

○高橋亜美氏 将来岩手で働きたいという気持ちは元からあって、県外か県内の大学どちらを選択するかを考えたときに、県外で違うところの魅力を知って岩手に持ち帰るという

こともできたと思いますが、自分としては岩手についてまだまだ何も知らないなというのが高校生の時に感じていたことで、そこで県外ではなく岩手に残って岩手のことを学んでから、岩手で就職できたら良いな、という思いのもとで、岩手大学を選択しました。

○司会 なるほど。岩手のことをもっともっと知りたい、それが岩手大学を選考するきっかけだったのですね。

○高橋亜美氏 そうですね、一番の大きなきっかけです。

○司会 そして、その後、民俗芸能サークルに所属されたわけですが、どうしてこのサークルを選んだのですか。

○高橋亜美氏 元々小学生の頃に、学校に「特設神楽クラブ」というものがあって、そこで地域の神楽を踊っていました。が、中学校、高校は、部活とか勉強が忙しくて、なかなかそのような活動ができなくてもどかしかったのですが、大学生に入学直後のサークルオリエンテーションで「ばっけ」の先輩たちが踊っている姿を見て、格好いいなと感じ、またやりたいなと思い、サークルに入りました。

○司会 そして、「ばっけ」では実際に地域の方々との交流を通じて伝統芸能を学んでいるのですよね。

○高橋亜美氏 はい、そうです。月に2、3回、私は盛岡の澤目獅子踊りを踊って、保存会の方々にお世話になっていますが、サークルのメンバーと1時間くらい自転車を漕いで保存会の練習に行って、踊りを指導していただいています。

○司会 自転車で行っているのですね。

○高橋亜美氏 そうです。自転車で行っています。

○司会 でも、伝統芸能を教えてもらうということは、相当難しい部分もあるのではないですか。

○高橋亜美氏 そうですね。私自身は小学校のときに躍ったりした経験が若干ありましたが、サークルのメンバーはほとんど大学生になって初めて躍るといふ、初めてそういう郷土芸能に触れているので、みんなゼロからのスタートなのです。本当に何もわからない状態から始まっているので、一つ一つの動作、例えば膝を曲げるとか、扇の動きに顔をつけて躍るとか、本当にそういう一つ一つの細かい動作を覚えるのが最初はやはり苦勞しますね。

○司会 ゼロからのスタートで文化を学ぶ、だからこそ見えてくるものもあつたりするの

ではないですか。

○高橋亜美氏 そうですね。一番にはやはり保存会の地域の方々の温かさをととても感じます。「ばっけ」と澤目獅子踊り保存会の話になってしまいますが、「ばっけ」で澤目獅子踊りを躍るきっかけというのが、10年以上前に澤目獅子踊り保存会の方々が後継者不足で悩んでいた時に、「ばっけ」の存在を知ってくださったそうで、それで直接岩手大学に足を運んでくださって、踊りを披露されて、私たちと一緒に躍りませんかと声をかけてくださったことがきっかけだったそうです。そこから脈々と交流が続いていて、現在もでも私たちが練習へ行くと、毎回毎回温かく迎えてくださって、本当に丁寧に指導していただいています。そして、練習が終わった後に、沢目地区はリングが有名ですが、保存会の方々が作ったリングやリングジュースをいつも用意してくださって、それをみんなで飲むのがとても楽しみです。

○司会 疲れを癒やしてくれる。

○高橋亜美氏 そうですね。そのような感じでこれまで取り組んできました。

○司会 でも、今のお話にあったように、自分たちのふるさとで生まれた文化や伝統が、後継者がいなくてなかなか伝えられないというのは、私も耳にすることが多いですが本当に残念なことだと思います。高橋さんは郷土芸能という分野を通じてそういうものを伝承されていていらっしゃるのですね。

○高橋亜美氏 そうですね。自分自身もこれからも携わっていきたいと感じますし、卒業されたOB、OGの方々も、出身は岩手ではない方でも、岩手に残って今もサークル時代に関わりのあった保存会に練習に行くと、一緒にイベントに出演されていたりします。澤目獅子踊り保存会も練習へ行くと、OB、OGの方々がたくさんいらっしゃるの、そういう姿を見ると、自分たちも頑張らなければいけないという気持ちになりますね。

○司会 本当に郷土芸能を通じて横の広がりがどんどん、どんどんつながっているというのを感じますね。

ところで、高橋は現在大学3年生の若手ということで、同世代の岩手出身のアスリートの方も本当に多く活躍していらっしゃいますよね。例えば大谷翔平さんや菊池雄星さんは花巻東出身なのですが、高橋さんも花巻出身ですね。

○高橋亜美氏 はい、花巻出身です。花巻東高校は野球が強くて、私たちが小学生、中学生の時もたくさん甲子園に出場されていましたが、やはり甲子園出場となると、本当に街を挙げて応援していて、ポスターや横断幕が街の中にいっぱい溢れている光景を小さい頃からよく見ていましたし、去年も甲子園に出場されて、本当に盛り上がっていたので、やはり野球が強いことやスポーツが盛んであることを身近に感じてきたところですよ。

○司会 スポーツの分野でも多くの岩手の若い人が活躍されていらっしゃいますが、村上弘明さん、岩手出身の野球選手が大リーグで活躍する、そんなニュースを耳にしたときは、どう思いましたか。

○村上弘明氏 びっくりしましたね。こんなことがあるのだろうか。

花巻東が甲子園に出場してあそこまで勝ち続けたというのも、私たちの時代からすると本当に信じられないですね。ラグビーの日本代表が決勝リーグ勝ち進むのと同じように、僕らが小さい頃は岩手代表の高校はとにかく出ると負けというか、1回戦で負けてもいいから、みっともない負け方はするなど、そういうレベルだったのですよ。

○司会 なるほど。

○村上弘明氏 とても優勝争いを競える野球のレベルではなかったです。それを思うと、本当に今は隔世の感がありますね。

実は、僕も野球少年だったのです。

○司会 村上さんもですか。

○村上弘明氏 ええ、実はそうなのです。

陸前高田出身ですが、実を言うと野球をするために宮城県へ越境入学して気仙沼高校へ行ったのです。当時は、三陸というか、気仙管内で甲子園に行ったことがある高校は、気仙沼高校だけだったのです。僕は、とにかく野球がやりたくて気仙沼高校へ進学したわけです。

気仙沼高校へ入学して、野球部に入部しようと思った。ところが、気仙沼高校は進学校でもあったのです。親としては、「お前を野球させに行かせたわけではない」と。野球部に入ると、下宿しなければいけないわけです。それで、下宿をさせることはできないということで、やむなく野球部に入ることを断念したのですが、僕らの世代では陸前高田市の気仙中学校が岩手県で優勝してしまっていて、その連中もみんな気仙沼高校へ進学したのですが、結局野球部には1人しか入らなかった。彼らがみんな野球部に入っていたら、ひょっとしたら甲子園へ行けたかもしれません。大谷翔平、菊池雄星ほどではないとは思いますが。

そして、今はなんとと言っても佐々木朗希君ですね。ドラフト1位でプロに入りましたが、順調に成長すれば将来は恐らく大リーグにも行ってくれるのではないかと思います。

○司会 注目の選手ですね。

○村上弘明氏 彼も陸前高田出身です。震災を機に大船渡に引越しされましたが。

実は私たちの同級生でもプロになった人がいます。ですが、うまくいかずに、最後はバッテリーピッチャーで終わってしまった。能力のある人自体は、過去にもたくさんいたと思います。よくよく探していけばいろいろな能力のある選手が岩手にたくさん埋もれて

いると思います。最近になって菊池雄星選手や大谷翔平選手が輩出されたというのは、指導者もそうですし、成長するための環境が十分に整ってきた、ということかとおもいます。ですから、これからの岩手は野球においても非常に可能性がある地域として期待できるものがあると思いますね。

○司会 確かに。

○村上弘明氏 白河の関を高校野球の優勝旗がまだ越えていない、白河の関を越える前に北海道に行ってしまった。やはり、白河の関を越えて優勝旗を持ってくるのは、岩手であってほしいなと僕は切に願っています。

○司会 そうですね。

国内外をまたにかけて活躍する方がいらっしやると、勇気をもらうことも多々ありますよね。

○村上弘明氏 そうですね。やはり励みになりますよね。震災のときには、サッカーのなでしこジャパン。あれは僕らにとって本当に勇気、励みになりました。

そして、震災の後に励みになったのがもう一つ、平泉が世界遺産登録されたことですね。震災からの復興は、清衡公が供養願文で述べたように、犠牲者を弔う、平和を願う、みんな平等であるという、いろいろ支え合う、助け合うという理念が一緒なわけですよ。そういう意味でもいろいろな物事を教わりました。

スポーツからもそうした影響を受けることがありますよね。最近では間違いなくラグビーだと思っていますね。個人的には佐々木朗希選手に頑張ってもらいたいと思っています。

○司会 応援していますね、村上さんも。

○村上弘明氏 はい。皆さんも応援してください。僕との関わり合いはまだありませんが、陸前高田出身ということで、是非よろしくお願いします。

○司会 そして、高橋さんもそうやって野球に縁のある花巻にお住まいということで、いろいろ講演会と聞く機会もあったのではないですか。

○高橋亜美氏 そうですね。中学生の時に、自分の中学校に花巻東高校の佐々木洋監督がいらっしやって、講演をしてくださったことがあります。その際に花巻東高校の野球部が実践されているという「マンダラート」という目標達成シートを紹介いただいたことがあります。マンダラートは、まず9マス、3×3のマスに目標を書いて、その書いたものをさらに細分化して何度も反復しながらアイデアを詰めていくというのですが、これを実際に大谷選手、菊池選手が実践されていたと、こんなことを書いていたということを紹介してくださいました。それがきっかけとなって、自分たちの中学校でも、その講演会の

後に一人一人がマンダラートを書くことを始めました。

○司会 実際に書いたのですか、マンダラート。

○高橋亜美氏 私も書きました。目標達成に向けて、このように取り組んでいくと良いよ、実際に今ではメジャーリーガーになっている方々もそれをやってきたよということを直接教えていただいて、私を始め、すごく刺激を受けた生徒はたくさんいたと思います。

○司会 とても大きな力をもらった感じですね。世界で活躍している人の原点というか、そうした取組をしたのだなど。

マンダラートの話題になりましたところで、会場の皆さんも結構メモを取っていらっしゃると思いますが、桜庭さん、このような取組はラグビーでもされたりすることがありますか。

○桜庭吉彦氏 そうですね。ラグビーにおいても、人づくりというのは大事な要素ですので、やはりいろいろな経験をしてもらうだとか、あるいは機会をつくってもらうということを我々大人がさまざま仕掛けていくことが大事だと思います。子供たちは、非常に潜在能力、能力を持っていると思いますので、とにかく機会を与えることが大切だと思います。昨年9月25日、釜石鶴住居復興スタジアムでの試合でも、子供たちが素晴らしい歌声で復興支援の感謝の歌を歌いあげてくれました。子供たちの能力というのをいかに引き出すかということは、幸福を追求していく上でもとても大事な事かなと思います。

○司会 子供たちの能力をいかに引き出すかというお話がありましたが、達増知事、岩手県としてもスーパーキッズという取組をされていらっしゃるんですね。

○達増知事 はい。体力測定で高い能力を持つ子供たちを選抜して、特定のスポーツではなくて、あらゆる体力づくり、基本的な体の動かし方、そしてさまざまなスポーツを経験してもらって、その中からそれぞれの分野に進んでもらおうという取組ですが、その取組の中から現在、スキージャンプ競技で活躍している小林陵侑選手も誕生していますし、今後オリンピックレベルの選手も誕生しています。

○司会 なるほど。小さい頃からの基盤づくりを県もバックアップしているということですね。

○達増知事 そうですね。ここまで、クロストークの出演者の皆さんのお話を聞いていて、幸福の秘訣を考えていたのですが、「幸福の秘訣は人にあり」という点に焦点があるような感じがしています。「人が人を育てる」という点に、さまざまな分野に共通した幸福の秘訣があると感じたのですが、例えばスポーツ分野ではスーパーキッズという企画で人材育成をしていくことによって、オリンピックなど、世界を舞台に活躍できるようなアスリートを養成するという、そうした現実的な目的ももちろんありますが、もし、そういうレベルまで至らなくても、そこで学んだ子供たち、学んでいる子供をさらに外側で見ている同級

生の子供たちなどにも影響がじわじわと広がっていくことによって、結果的に岩手全体の幸福度を高めていくということにもつながっていくのではないかと思います。

○司会 なるほど。ありがとうございます。

佐藤さんは「いわてグラフ」などでさまざまなところに取材に出かけられていて、実際にアスリートの方にもたくさんお会いしていますよね。

○佐藤利智子氏 はい。大谷翔平君とか、菊池雄星君という有名人もいますが、先ほど知事がおっしゃった小林陵侑君はもちろん、あとスノーボードの岩淵麗楽さんとか、ボルダリングの伊藤ふたばさんといった、世界でもトップを争う位置で頑張っている選手たちを取材することがありますが、彼らは岩手育ちではありますが、もしかしたら岩手出身だから、岩手育ちだからといった意識はないのかなと感じることがあります。といいますのも、おそらく早い段階からさまざまな世界の強豪と交わる機会が多く、岩手にいながらも国際感覚を身につけているというか、さまざまな壁を越えて渡り合い、戦い合うことが早いうちからできる若い世代が生まれてきているのかなということを感じますね。

○司会 この後も注目の選手が本当にたくさんいらっしゃいますよね。

やはりそのような選手たちのパワーの源になっているのは、岩手の食材ということもあつたりするのでしょうか。

○佐藤利智子氏 もちろんです。食はとても大切です。

○司会 食べることは本当に大切ですよね。

○佐藤利智子氏 そうです。食べるものが体を作っていくので、やはり岩手というのは、そういう意味では非常に豊かな資源がたくさんあって、美味しいものを食べられる環境というのが整っていると思います。

○司会 体を作るのは食。本当に日々の、毎日の食生活が大事になって、そうやってスーパーアスリートを生み出している原動力にもなっているのでしょうか。知事はどう思いますか。

○達増知事 はい。私もあちこちで、なぜ菊池雄星君、大谷翔平君、そして佐々木朗希君と、岩手からもの凄いプロ野球選手が生まれるのか聞かれることが多いですが、岩手は食べ物が良いからと、彼らが生まれ育ってずっと食べているのが岩手の食べ物なので、それでそのような大物が生まれている、と説明しています。

○司会 なるほど。やっぱり食べるもの、そして食べることは大事なんですね。

○達増知事 ラグビーワールドカップのウルグアイーフィジー戦でも、ウルグアイ代表は

早くから岩手入りし、10日間ぐらい岩手のものを食べて準備し、フィジーは札幌から岩手入りし、余り長い日数岩手ものを食べていない。それで、ウルグアイがランキングの順位を逆転して勝ったのではないかと。

○桜庭吉彦氏 そうですね。戦前はフィジーの方が強いのではないかということでしたが、岩手の食のエネルギーを追い風にして、多分勝つことができたのではないかなと思います。

○司会 なるほどですね。

○桜庭吉彦氏 あと、いま素晴らしい活躍をしている方、もちろんそれはそれで素晴らしいことだと思いますが、僕はそれぞれに役割があると思っています。それを支える人もそうですし、それを陰で支えている人もそうですし、そういう役割が実はとても大切なことであって、そのような役割が社会に何か貢献しているという貢献感につながって、それがまた幸福につながっていくのではないかなと僕は思っています。

○司会 なるほど。ここまで皆さんにいろいろなお話を聞いてきましたが、ここで改めて県民計画のキーワードである幸福について伺いたと思います。

皆さんが幸福を感じる瞬間や岩手での暮らし、そしてつながりの中で幸福を感じたお話などを一言ずつ聞いていきたいと思いますが、まずは高橋さん、いかがでしょうか。

○高橋亜美氏 私が幸福を感じるのは、「ばっけ」の活動の中でたくさんボランティア公演の依頼をいただくことがあり、その公演先には老人ホームがとても多いのですが、公演を観に来てくれたおじいちゃん、おばあちゃんが涙して喜んでくれたり、「若い子たちが頑張っているのを見て元気をもらえる」といった形で声をかけていただいたりすることも多く、その言葉が本当に私たちの励みになるというか、またこれからも頑張ろう、もっとうまくなりたいという気持ちにさせてもらえるので、そのときにやっていて良かったなど、本当に幸福を感じる瞬間になっています。

あと、やはりサークルのみんなと踊るのが本当に楽しいですし、保存会の方々と一緒に踊るのも本当に楽しいので、踊っている瞬間一つ一つが本当に幸福だなと感じます。

○司会 民俗芸能を通じて幸せを本当に心から感じているというのが伝わってきますね。

○高橋亜美氏 そうですね。

○司会 ありがとうございます。

○高橋亜美氏 ありがとうございます。

○司会 続きまして、佐藤さんはいかがでしょう。

○佐藤利智子氏 私は、普通であることというか、当たり前であることが一番幸せなのではないかなと思います。それは、震災があった岩手だからこそ、そのありがたみというか、そういうことを一番感じられる場所ではないかと思うし、それを日本に向けて伝えていける場所でもあると思うので、自分自身も普通に安らぎのある日々の中で暮らせることが一番幸せかなと思います。

○司会 普段の日常の中で常にそのような幸せを見つけていらっしゃるということですね。

続きまして、桜庭さん、お願いいたします。

○桜庭吉彦氏 私は、笑顔のある生活、あるいは笑顔のある場というのが幸せな瞬間であると感じています。それは、もちろん一番小さな単位ですと家族であり、あるいはさまざまな人とのつながり、あるいは関わりの中で笑顔というものは出てくると思いますし、そこには当然安全、安心して暮らせる社会であるだとか、あるいは食だとかということも通じて、笑顔というものを是非これからも大切にしたいです。特に私の場合はたくさんの方々にラグビーであるだとか、あるいはスポーツを通じて笑顔になって作っていただけるような取組を続けていきたいと考えております。

○司会 ありがとうございます。

続きまして、村上さん、いかがでしょうか。

○村上弘明氏 先ほど高橋さんが言われた、「ばっけ」の活動を通じてそれで喜んでもらえるというのは幸せだということにはとても共感します。僕も本日、偉人局の動画撮影で工藤さんが私と一緒に共演してくれて幸せを感じたと、そう言われた瞬間に幸せを感じましたね。

佐藤さんが言われた普通であることが幸せだということにもとても共感します。私は震災を外で体験しましたが実家を失いました。やはり震災の起こる前の日までは普通の日常があったこと、ずっとその日常があると思っていたのにある一瞬でその日常がなくなったこと、それはもう絶対元に戻れないということ。そこで初めて日常のありがたさを感じるというか、そういうことに思いを馳せつつ、家庭の中で子供たちと一緒に生活をしています。私の子供たちは、父親に対して何の感謝もしていないのですが、でも子供たちが10年先、20年先、あるときになって幸せだと感じるのだろうと僕はイメージしていますし、そうあって欲しいほしいと願っていますが、そういう何げない日常の中に幸せを感じます。

もう1点は、これは陸前高田だけでなく、各地域にも言えることだと思いますが、それぞれ被災地といっても、気候、風土、地形が全部違うわけで。その中で、先人たちがどのようなまちづくりをしてきたのか。膨大な時間をかけて、試行錯誤を経て、いろんな知恵を出し合って、恐らく多くの犠牲者も出したであろう、その果てに自分たちのまちづくりを行った、文化を築き上げた。こういったことを我々世代がもう一回振り返って、それを見直して、それを残していくという、そこからまた新しいまちの方向性が見えてくるき

っかけになるのではないだろうかと思っています。

津波伝承館が去年の9月にオープンしましたが、それとはまた別に地域内での伝承というものを進めていってほしいなと思っています。

そういったことを、仲間同士でお酒を飲みながら、地域の食を堪能しながら、話し合ったり、明日のことを考えたりということが、僕にとっての大きな幸せです。

○司会 ありがとうございます。

それでは、最後になりますが、達増知事、県内外で活躍する人の今や皆さんの幸福感を聞いてきましたが、いかがでしたでしょうか。達増知事が思い描く岩手の未来についてコメントをいただければと思います。

○達増知事 新しい県民計画を作る際に、特にその準備段階で、京都大学で幸福に関する研究をしている広井良典教授に何度か岩手にも来てもらい、さまざま協力をいただいていたのですが、その広井教授がおっしゃるには、経済や科学の対象としているものが、物から情報へ、さらに命へと移り変わっていると。それで、経済的価値についても、昔は物そのものに経済的価値があって、物が足りない時代、食べ物が足りない時代であれば、とにかく食べるものがありたく、また安ければ安いほど良い、といった状況だったところから、そこに徐々に情報という要素が加わり、さらに現在、命を感じられるものにこそ価値があるという考えになってきているのではないかと話をされていました。例えばラグビーというも命が燃えるということを体感できるスポーツですし、まさにそのような瞬間を見たり、参加したり、さらにそれを語り継いだりすることが価値になってきているのではないかと思います。経済では「モノ消費」から「コト消費」に、物にお金を出すより、こと、つまり出来事にお金を出すようになってきている。例えばラグビーの試合を見るというのはものを手に入れるということとは違いますよね。試合自体は、ほんの1、2時間で終わってしまうものですが、そこで行われている出来事そのものに大きな価値があって、だからこそお金をも払ってでも見たいということになっていると思います。それは食の分野もそうだし、工芸でもそうだし、物自体にお金を払うという以上の、それを作った人の命がそこに込められているということを実感できればできるほど、またさらに高い価値が生まれると思います。民俗芸能は、まさに命を燃やすもの、古代から今までずっとそのように続いていることだと思います。

道路も、道路そのものに価値があるわけではありませんし、道路そのものから幸福を感じたりはしないものですが、移動時間の短縮というのは、やはり時間というものは寿命の一部ですし、時間もまた命ですよね。ですから、時間を短縮することで自分ができることが増える、そこに自分の命をかけられるみたいなことが、かけがえのない価値となるのだと思います。

命を込める、命を燃やす、そういった場面で、人間誰もが一人一人持っている無限の価値が現れる、感じられる。その人間が持つ無限の価値の一部でも引き出せたときに、そこに幸福というのが感じられるのなと思いました。

ですから、広井先生の理論でいうところの、物、情報、命と発展してきているというのは角度を変えると、そこにはやはり人がということが何より大事だということになります。

そういう命を感じたり、命を持っている人が人を育てたりする時や、人が育っていく時、そういう時に幸福というものが感じられるのかなと思います。

この、幸福の理論は、経済学から発展してきていることもありますので、県民所得を上げるとか、一人一人の収入を増やすということに現実的に役立たせることができる部分もあり、そういう面も大事と考えてはいます。同時に、お金では図ることができない価値ということにも深く関わってくるわけでありまして、岩手県としてはお金も大事にしていかなければならないし、あとは物自体も、やっぱり食べ物、なくて困るとかいう局面はあって、安くてもとにかく食べ物が必要という、物に不自由している人たちのことも考えていかなければいけません。一方でそういう物やお金で、それを超えた価値というものを岩手が大切にしていくことで、岩手に住んで良かった、岩手に行きたい、そして岩手にまた来ようといった人の流れにもつながるようにしていきたいということがまさに「いわて幸せ大作戦」ですので、いろいろ腑に落ちないところもあるかもしれませんが、今後も今日のフォーラムのような場で学んでいただきながら、そして私自身もそうやって学びながら、より「いわて幸せ大作戦」の精度を高めて、効果を高めていかなければと思っておりますので、引き続きよろしく願いいたします。

本日御参加の皆さん、本当にありがとうございました。

○司会 ありがとうございます。

閉会

○司会 本日の、「いわて幸せ大作戦フォーラム」を通じて、多くの幸せであふれる岩手の未来に、皆様希望を持っていただけましたでしょうか。

東日本大震災津波からの復旧、復興の経験を生かし、多様な県民一人一人が生きやすいと感じられるような幸福を追及していける岩手県、そして互いに支え合いながら、その幸福を守り育て、さらには次世代にも幸福を引き継いでいけるような持続可能な「希望郷いわて」をみんなで築くことができたら幸いと思います。各界からの皆さんのお話から、幸福、希望の芽が皆さん芽生えたのではないかと思います。

それでは、本日素敵なトークをいただきましたゲストの皆さんに、どうぞ皆様、大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

皆様、ありがとうございました。どうぞ御降壇の方、お願いいたします。

本当にお話が盛り上がって、あっという間のお時間だったのですが、ここで皆様に御案内がございました。

お帰りの際は、お忘れ物がございませんようお気をつけてお帰りくださいますようお願い申し上げます。

また、皆様にアンケートの御協力をお願いいたします。本日皆様のお手元にアンケート用紙の御用意をさせていただいております。アンケートに御協力をいただいた方には、岩手県産米金色の風キューブパック、またはサヴァ缶のどちらか1つをプレゼントさせていただきます。後方の出口でアンケートとプレゼントの引き換えとなります。皆様、恐縮ですが、後方の出口にてアンケート用紙とプレゼントの引き換えとなりますので、御了承いただければと思います。

また、釜石シーウェイブスのグッズ販売とサポーター加入の受け付けもロビーにて行っております。桜庭さんもこちらの受け付けの方にいらっしゃいますので、是非この機会に足を運んでいただければと思います。

本日は、皆様、「いわて幸せ大作戦フォーラム」に御来場いただきまして、誠にありがとうございました。